

谷崎潤一郎「陰翳礼讃」関連文献目録 1933―2021

西 村 将 洋

解 題

本目録は、作家の谷崎潤一郎（1886―1965）によるエッセイ「陰翳礼讃」の関連文献を集成したものであり、同作品が発表された一九三三年から二〇二一年までの期間を対象としている。本目録における関連文献とは、「陰翳礼讃」の本文が収録されている文献（教科書も含む）や、同作品を対象とした論文及び批評、同作品との関連性が認められる創作、さらに同作品についての言及がある雑誌や新聞の記事を指している。これらの情報を収集して書誌学的に整理することで、「陰翳礼讃」の受容史や、同作品に関係する言説を展望すること、それが本稿の主要な目的である。

「陰翳礼讃」の本文には、様々な文化領域（文学、建築、映画、演劇、美術、茶道、照明、食など）に関する言及がある。そのため同作品は、文学以外のジャンルの関連文献においても、しばしば注目を集めてきた。本目録で

は、できるかぎり網羅的なデータの収集を目指したが、他方で、全てのジャンルについて完璧な調査を行うことは困難であり、関連文献の遺漏も生じていると考えられる。その意味で本目録は不十分な内容に止まるのだが、ひとまず現段階でのデータを公表することで、識者に判断を委ねることとした。

加えて、「陰翳礼讃」は多数の外国語へ翻訳されており、外国語による関連文献も複数存在している。筆者が調査したかぎりでは、「陰翳礼讃」を翻訳した単行本は、英語版及びフランス語版（一九七七年刊）、イタリア語版（一九八二年刊）、タイ語版（一九八五年刊）、ドイツ語版（一九八七年刊）の順番で刊行されており、その他にもガリシア語版（二〇一〇年刊）やヘブライ語版（二〇一二年刊）など、少なくとも一六カ国語で「陰翳礼讃」は翻訳行されている。本来であれば、それらの外国語文献も目録化すべきだが、本稿では割愛し、日本語文献のみを対象としていることをお断りする。ただし、外国語の関連文献が邦訳されているケースについては日本語文献として扱い、本目録にも収録している。

最後になるが、筆者の「陰翳礼讃」に関する見解については、拙著『谷崎潤一郎の世界史——『陰翳礼讃』と20世紀文化交流』（勉誠出版、二〇二三年二月刊行予定）を参照されたい。同書では、右に述べた「陰翳礼讃」の外国語訳や日本国外の関連文献に関する情報を紹介するとともに、一部の事例については個別に考察を加えている。

《凡例》

一、本目録は一九三三年から二〇二一年までの期間を対象に、「陰翳礼讃」の関連文献を年代毎に分け、編年史として目録化したものである。

一、単行本や雑誌、新聞などの刊行物のタイトルは『』で示し、論文や記事のタイトルは「」で示した。また著者名が記されていない場合には（無署名）と記載した。

一、単行本については、著者名、タイトルを記載し、その後の（ ）内に出版社名と発行年月を記した。

一、雑誌や新聞の記事については、著者名、タイトルを記載し、その後の（ ）内に、雑誌の場合には、誌名、巻号数、発行年月を、新聞の場合には、紙名、発行年月日、朝刊と夕刊の違いを記した。

一、論文集や雑誌の特集号など一点の刊行物の中に、複数の関連文献が収録されている場合には、最初の行に論文集や特集号に関する書誌的事項を記載した後、次行以降に二字下げで収録された関連文献の著者名とタイトルを列挙した。

一、新聞記事については、新聞社のデータベース（『朝日新聞』『日本経済新聞』『毎日新聞』『読売新聞』の四紙）を調査し、必要に応じて実際の紙面も確認した。ただし一九九〇年代前後から記事の件数が余りにも多くなつたことから、「陰翳礼讃」についての簡単な言及や紹介を行っている記事、あるいは一般読者の投稿などは割愛している。

一、「陰翳礼讃」の教科書への掲載については、最初に《教科書への収録／＼年》と記した後（この「＼年」とは教科書の使用開始年を示す）、教科書収録時のタイトル、矢印の記号（↓）の順番で記載し、その後に教科書名と出版社名を列挙した。

一、「陰翳礼讃」の教科書掲載に関する情報は、阿武泉監修『読んでおきたい名著案内 教科書掲載作品13000』（日外アソシエーツ、二〇〇八年）を参照した。ただし同書は一九四九年から二〇〇六年までの期間を対象と

してデータを収集しているので、本目録でもそれ以外の期間は対象外となっている。その点は特に注意されたい。

一、書誌的事項について補足説明が必要となる場合には、筆者が「」内に追記を行った。

一、関連文献について補足説明が必要となる場合には、書誌的事項を記載した後の「※」以下の部分で、筆者が追記を行った。

【一九三〇年代】

- 谷崎潤一郎「陰翳礼讃」(『経済往来』第八卷第一三三号、一九三三年二月～第九卷第一号、一九三四年一月)
- ※「陰翳礼讃」の初出。『経済往来』は日本評論社が発行した総合雑誌である。
- (無署名)「編集後記」(『経済往来』第九卷第一号、一九三四年一月)
- 三上秀吉「谷崎潤一郎氏の「陰翳礼讃」是非」(『あらくれ』第二卷第三号、一九三四年三月)
- 谷崎潤一郎『摂陽随筆』(中央公論社、一九三五年五月) ※「陰翳礼讃」の全文を収録。
- (無署名)「摂陽随筆 谷崎潤一郎著」(『良書百選』第五輯、日本図書館協会、一九三六年三月)
- 谷崎潤一郎『鴉鵲籠雜纂』(日本評論社、一九三六年四月) ※「陰翳礼讃」の全文を収録。
- 徳田浄編『現代文鈔 下』(奈良女子高等師範学校附属高等女学校、一九三六年一〇月) ※「陰翳礼讃」の一部を抄録。
- 周作人『周作人随筆集』(松枝茂夫訳、改造社、一九三八年六月) ※同書収録の「冬の蠅」に「陰翳礼讃」への言及あり。

- 日夏耿之介「谷崎文学の民族性」(『中央公論』第五四年第二号、一九三九年二月)
- 大森志朗編『日本文化論纂』(拓文堂、一九三九年一月) ※「陰翳礼讃」の一部を抄録。
- 谷崎潤一郎『陰翳礼讃』(創元社「創元選書」、一九三九年二月) ※「陰翳礼讃」の全文を収録。
- 岡崎義恵「谷崎源氏論(2) 損われた原文の陰翳・含蓄」(一九三九年五月二四日朝刊七面)

【一九四〇年代】

- 萩原朔太郎「思想人としての谷崎潤一郎と正宗白鳥」(『文芸日本』第二年第五号、一九四〇年七月) ※この記事は直後に上梓された、萩原朔太郎『阿帯——萩原朔太郎随筆集』(河出書房、一九四〇年一〇月)にも収録されている。
- 吉井勇「形影居聯吟」(『人間』第一卷第六号、一九四六年六月) ※連作短歌として「蘆刈」「倚松庵主人に寄す」「陰翳礼讃」の三作品が収録されている。
- 桑原武夫「谷崎潤一郎氏のインエイ・ライサン」(『文芸』第四卷第二号、一九四七年三月)

【一九五〇年代】

- 日夏耿之介『谷崎文学——日本今代心理之考察』(朝日新聞社、一九五〇年三月) ※「谷崎文学の民族的性格」で「陰翳礼讃」に言及。

- 谷崎潤一郎『谷崎潤一郎作品集』第九卷（創元社、一九五一年一月）※「陰翳礼讃」の全文を収録。辰野隆「解説」が「陰翳礼讃」に言及。
- 谷崎潤一郎『谷崎潤一郎随筆選集』第一卷（創芸社、一九五一年六月）※「陰翳礼讃」の全文を収録。井上靖「解説」が「陰翳礼讃」に言及。
- 谷崎潤一郎『陰翳礼讃』（創元社「創元文庫」、一九五二年三月）※「陰翳礼讃」の全文を収録。辰野隆「解説」が「陰翳礼讃」に言及。
- 谷崎潤一郎『谷崎潤一郎文庫』第三卷（中央公論社、一九五三年一〇月）※「陰翳礼讃」の全文を収録。
- 永井荷風、谷崎潤一郎『現代随想全集』第一一巻（創元社、一九五三年二月）※「陰翳礼讃」の全文を収録。
- 十返肇「解説」が「陰翳礼讃」に言及。
- E・G・サイデンステッカー「日本その日その日——谷崎の『陰翳礼讃』を読んで」（『読売新聞』一九五四年五月二四日朝刊八面）
- 谷崎潤一郎『陰翳礼讃』（角川書店「角川文庫」、一九五五年七月）※「陰翳礼讃」の全文を収録。E・G・サイデンステッカー「解説」が「陰翳礼讃」に言及。
- 「谷崎潤一郎読本」（『文芸』第一三卷第四号「臨時増刊」、一九五六年三月）
 - 山本健吉「谷崎潤一郎と陰翳礼讃」
 - 亀井勝一郎「『少将滋幹の母』覚書」

● 十返肇編『少年少女日本文学選集⑬谷崎潤一郎名作集』（あかね書房、一九五六年四月）※同書には「陰翳礼讃」の一部を抄録。

十返肇「谷崎潤一郎のおいたちとその作品」

石田成太郎「読書のあとで」

● 谷崎潤一郎『現代日本文学全集71谷崎潤一郎集（二）』（筑摩書房、一九五六年四月）※「陰翳礼讃」の全文を収録。伊藤整「解説」が「陰翳礼讃」に言及。

● 大河内昭爾『青春文学ノート』（淡路書房、一九五六年八月）※「谷崎潤一郎「陰翳礼讃」」を収録。

● 《教科書への収録／一九五七年》タイトル「陰翳礼讃」↓『新高等国語 三下』（大修館書店）。タイトル「陰翳礼賛」↓『高等国語 二』（清水書院）。

● 谷崎潤一郎『谷崎潤一郎全集』第二二卷（中央公論社、一九五九年四月）※新書判自選全集。「陰翳礼讃」の全文を収録。

● 吉田精一編『近代文学鑑賞講座 第九卷 谷崎潤一郎』（角川書店、一九五九年一〇月）※同書には「陰翳礼讃」の一部を抄録。

吉田精一「谷崎潤一郎 本文および作品鑑賞 陰翳礼讃【鑑賞】」

寺田透「谷崎潤一郎の文体」

● 谷崎潤一郎『谷崎潤一郎全集』第二二卷（中央公論社、一九五九年四月）※「陰翳礼讃」の全文を収録。伊藤整「解説」が「陰翳礼讃」に言及。

【一九六〇年代】

- 《教科書への収録／一九六〇年》タイトル「陰翳礼讃」↓『新高等国語 新訂版3』（大修館書店）。
- 白井吉見編『現代教養全集26古典案内』（筑摩書房、一九六〇年十二月）※「陰翳礼讃」の全文を収録。
- 伊藤整ほか編『鑑賞と研究 現代日本文学講座 評論・随筆2大正期』（三省堂、一九六二年七月）※「陰翳礼讃」の一部を抄録。高田瑞穂が「陰翳礼讃」の「解題」と「解説」を担当。
- 長谷川如是閑ほか『世界教養全集6』（平凡社、一九六二年八月）※「陰翳礼讃」の全文を収録。
- 《教科書への収録／一九六三年》タイトル「陰影の美」↓『現代国語 一』（三省堂）。
- 磯崎新「闇の空間」〔『建築文化』第二二二号、一九六四年五月〕
- 《教科書への収録／一九六五年》タイトル「陰影礼賛」↓『高等学校現代国語 三』（好学社）。
- 福田恆存編『現代日本思想大系32 反近代の思想』（筑摩書房、一九六五年二月）※「陰翳礼讃」の全文を収録。
- 福田恆存「反近代の思想」が「陰翳礼讃」に言及。
- 橘弘一郎『谷崎潤一郎先生著書総目録』（ギャラリー吾八、一九六五年四月）※「第百三冊 陰翳礼讃 創元選書36」を収録。
- 橋本芳一郎『谷崎潤一郎の文学』（桜風社、一九六五年六月）※「谷崎文学における「日本的」なもの」で「陰翳礼讃」に言及。
- 谷崎松子、エドワード・G・サイデンステッカー「対談 文豪をしのぶ」（『日本の文学 第24巻 谷崎潤一郎 附録25』中央公論社、一九六六年二月）

- 吉田精一ほか編『近代文学』（東出版、一九六六年四月）※「陰翳礼讃」の一部を抄録。
 - 《教科書への収録／一九六七年》タイトル「陰翳礼讃」↓『改訂版 国語現代文 二』（教育図書研究会）。タイトル「陰影の美」↓『新編 現代国語 一』（三省堂）。
 - 亀井勝一郎・白井吉見編『人生の本9日本の美』（文芸春秋、一九六七年七月）※「陰翳礼讃」の全文を収録。
 - 谷崎潤一郎『日本の文学25 谷崎潤一郎（三）』（中央公論社、一九六七年一〇月）※「陰翳礼讃」の全文を収録。ドナルド・キーン「解説」が「陰翳礼讃」に言及。
 - 《教科書への収録／一九六八年》タイトル「陰影礼賛」↓『高等学校現代国語 三』（好学社）。
 - 村松剛ほか編『昭和批評大系 第一卷（昭和初年代）』（番町書房、一九六八年五月）※「陰翳礼讃」の一部を抄録。
 - 桑原武夫『桑原武夫全集』第三卷（朝日新聞社、一九六八年九月）※「谷崎潤一郎氏のインエイ・ライサン」を収録。
 - 井上靖・白井吉見編『10冊の本 8 美をたずねて』（主婦之友社、一九六九年四月）※「陰翳礼讃」の全文を収録。
- 【一九七〇年代】
- 《教科書への収録／一九七〇年》タイトル「陰影の美」↓『新編 現代国語 一 改訂版』（三省堂）。
 - 日下哲夫「「陰翳礼讃」その教材分析」（『愛媛国文と教育』第二号、一九七〇年六月）
 - 長谷章久「陰翳礼讃 写真と解説」（『国文学 解釈と教材の研究』第一五卷第八号、一九七〇年六月）

● 伊藤整『谷崎潤一郎の文学』（中央公論社、一九七〇年七月）※「谷崎潤一郎全集」解説の「第十六巻」と「第二十二巻」で「陰翳礼讃」に言及。

● 《教科書への収録／一九七一年》タイトル「陰翳礼讃」↓改訂版 国語現代文 二（教育図書研究会）。

● 磯崎新『空間へ』（美術出版社、一九七一年二月）※「闇の空間——イリュージョンの空間構造」で「陰翳礼讃」に言及。

● 中村雄二郎「陰翳礼讃」と「フィーリング」（『読売新聞』一九七一年五月二五日朝刊一七面）

● 田中伸「谷崎潤一郎著「陰翳礼讃」」（『国文学 解釈と教材の研究』第一六巻第一〇号、一九七一年八月）

● 《教科書への収録／一九七二年》タイトル「陰影礼賛」↓『高等学校現代国語 三 改訂版』（好学社）。

● 荒正人編『谷崎潤一郎研究』（八木書店、一九七二年一月）

荒正人「総論」

益田勝美「「陰翳礼讃」論」

ジャクリーヌ・ピジョー、水島裕雄訳「谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』」

● 《教科書への収録／一九七三年》タイトル「陰翳礼讃」↓『高等学校現代国語 三 改訂版』（学校図書）。

● 小川和佑「陰翳礼讃」（『国文学 解釈と鑑賞』第三八巻第八号、一九七三年六月）

● 野口武彦『谷崎潤一郎論』（中央公論社、一九七三年八月）※同書の第四章「故郷としての異郷」及び第五章

「女」の存在論」が「陰翳礼讃」に言及。

- 《教科書への収録／一九七四年》タイトル「陰翳礼讃」↓『現代国語 二』（教育出版）、『現代国語 二』（教育図書研究会）。
- 野村尚吾『谷崎潤一郎の作品』（六興出版、一九七四年二月）※「古典回帰の時代」で「陰翳礼讃」に言及。
- 笠原伸夫「異形なる闇を裂く——近代の歪みを突く「陰翳礼讃」の思想について」（『日本及日本人』第一五三〇号、一九七五年七月）
- 谷崎潤一郎『陰翳礼讃』（中央公論社「中公文庫」、一九七五年一〇月）※「陰翳礼讃」の全文を収録。吉行淳之介「解説」が「陰翳礼讃」に言及。
- 野口武彦ほか『シンポジウム日本文学16 谷崎潤一郎』（学生社、一九七六年一月）※第二章「関西移住と古典回帰」で「陰翳礼讃」に言及。
- 秦恒平『谷崎潤一郎——源氏物語』体験』（筑摩書房、一九七六年一月）※「谷崎潤一郎論」で「陰翳礼讃」に言及。
- 《教科書への収録／一九七七年》タイトル「陰翳礼讃」↓『新訂 現代国語2』（教育出版）。
- T「谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」英訳」（『読売新聞』一九七八年一月三〇日夕刊五面）
- （無署名）「国際線 谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」が英訳」（『毎日新聞』一九七八年四月二一日東京夕刊七面）
- 神谷忠孝「日本美の再評価——『陰翳礼讃』をめぐる」（『国文学 解釈と教材の研究』第二三卷第一〇号、一九七八年八月）
- 山片三郎「建築物語（5）陰翳礼讃」（『新住宅』第三七八号、一九七八年二月）

・中上健次「物語の系譜・八人の作家 谷崎潤一郎 連載・2」(『国文学 解釈と教材の研究』第二四卷第三号、一九七九年三月)

・網野義紘「『陰翳礼讃』の世界」(『教育出版高校通信』第一三卷第三号、一九七九年三月)

・中村昌生「茶苑の構成——陰翳礼讃」(『茶道の研究』第二四卷第一号、一九七九年一月)

【一九八〇年代】

・『教科書への収録／一九八〇年』タイトル「陰翳礼讃」↓『最新現代国語2』(教育出版)。

・加藤周一『日本文学史序説 下』(筑摩書房、一九八〇年四月)※「谷崎潤一郎と小説家たち」で「陰翳礼讃」に言及。

・島田巽「雪後庵の傘」(『学燈』第七八卷第七号、一九八一年七月)

・多田道太郎、安田武「関西——谷崎潤一郎にそって」(筑摩書房、一九八一年一月)※「住いの章・楽園放浪」で「陰翳礼讃」に言及。

・『教科書への収録／一九八二年』タイトル「陰翳礼讃」↓『国語1』(教育出版)。

・中野孝次「『陰翳礼讃』の新しいさ」(『谷崎潤一郎全集』第九卷 月報9)中央公論社、一九八二年一月)

・前田久徳「陰翳の美学——少将滋幹の母」の構造と方法」(『国語と国文学』第五九卷第六号、一九八二年六月)

・平井邦男「陰翳の美学——谷崎潤一郎の「吉野葛」をめぐって」(『大手前女子大学論集』第一六卷、一九八二年一月)

- 千葉俊二編『鑑賞日本現代文学 第8巻 谷崎潤一郎』（角川書店、一九八二年二月）※「陰翳礼讃」の一部を抄録。千葉俊二「谷崎潤一郎 本文および作品鑑賞」が「陰翳礼讃」に言及。
- 谷崎潤一郎『谷崎潤一郎全集 第二〇巻（中央公論社、一九八二年二月）※「陰翳礼讃」の全文を収録。
- 《教科書への収録／一九八三年》タイトル「陰翳礼讃」↓『高等学校現代文』（角川書店）、『新国語2』（三省堂）、『高等学校現代文』（大修館書店）、『高等学校現代文』（第一学習社）、『現代文』（明治書院）。タイトル「陰翳礼讃」↓『高等学校用現代文』（筑摩書房）。
- 前久夫「陰翳礼讃と日本家屋の特質 文学作品にみる住まいの変遷⑫」（『月刊国語教育』第三巻第六号、一九八三年八月「九月号」）
- 《教科書への収録／一九八四年》タイトル「陰翳礼讃」↓『高等学校新現代文』（第一学習社）。
- （無署名）「にんげん発見 ボンジュール大和の心——パリ第3大学教授ルネ・シフェール氏」（『日本経済新聞』一九八四年一月八日朝刊七面）
- 内藤昌「陰翳の魔法」（『太陽』第二六一号、一九八四年二月「二月号」）
- 大谷晃一『仮面の谷崎潤一郎』（創元社、一九八四年三月）※「第五帖 月明かりの芝生」で「陰翳礼讃」に言及。
- 谷崎潤一郎『谷崎潤一郎随筆集』（岩波書店「岩波文庫」、一九八五年八月）※「陰翳礼讃」の全文を収録。篠田一士「解説」が「陰翳礼讃」に言及。
- 特集「生誕百年 谷崎潤一郎」（『国文学 解釈と教材の研究』第三〇巻第九号、一九八五年八月）
 - 村松友視「陰翳礼讃の時代」
 - 前田久徳「日本回帰の虚像と実像」

- 林正子『「陰翳礼讃」論——谷崎の〈闇〉へのアプローチ』(『国文学研究ノート』神戸大学「研究ノート」の会、第一八号、一九八五年九月)
- 《教科書への収録／一九八六年》タイトル「陰翳礼讃」↓『高等学校現代文 改訂版』(角川書店)、『新訂 国語2』(教育出版)、『新国語2改訂版』(三省堂)、『高等学校現代文 改訂版』(大修館書店)、『高等学校現代文(二訂版)』(第一学習社)、『現代文 新修版』(明治書院)。
- 前久夫『文学の舞台——住まい』(東京美術選書42、東京美術、一九八六年一月) ※第三章「「陰翳礼讃」と日本家屋の特質」で「陰翳礼讃」に言及。
- 清水良典「記述の国家——谷崎潤一郎原論」(『群像』第四一巻第六号、一九八六年六月)
- ミシエル・フーコー「手紙 M・フーコーからジャン・ダニエルへ」(桜井直文訳『ミシエル・フーコー「真理の歴史」』新評論、一九八六年六月) ※ジャン・ダニエルは雑誌『ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』の編集長。この手紙に関しては、西野厚志「谷崎潤一郎研究史」(『KAWADE夢ムック 文芸別冊 谷崎潤一郎』河出書房新社、二〇一五年二月)も参照。
- 安藤忠雄、村松友視「連載対談12回 村松友視の人物ライブスポット 安藤忠雄——都会、下町、山肌に、コンクリートの陰翳礼讃」(『週刊朝日』第九一卷五一号、一九八六年一月二八日) ※この記事の後には村松友視「対談後記」も掲載されている。
- 《教科書への収録／一九八七年》タイトル「陰翳礼讃」↓『新編 現代文』(東京書籍)。

・ Donald・キーン『二つの母国に生きて』（朝日新聞社「朝日選書」、一九八七年一月）※IV「谷崎先生のこと」で「陰翳礼讃」に言及。

・ 高橋世織「陰翳礼讃」（『高校通信 東書国語』第二七八号、一九八七年二月）

・ 手塚昌行「陰翳礼讃」（『日本文芸鑑賞事典』第一〇巻、ぎょうせい、一九八八年二月）

・ 《教科書への収録／一九八九年》タイトル「陰翳礼讃」↓『高等学校現代文 三訂版』（角川書店）、『高等学校現代文 新版』（学校図書）、『最新国語2』（教育出版）、『新国語2三訂版』（三省堂）、『高等学校現代文 三訂版』（大修館書店）、『現代文 新訂版』（明治書院）。

・ 千葉伸夫『映画と谷崎』（青蛙房、一九八九年二月）※「陰翳の美学」の章で「陰翳礼讃」に言及。

【一九九〇年代】

・ 《教科書への収録／一九九〇年》タイトル「陰翳礼讃」↓『現代文』（尚学図書）。

・ 高田宏「プロムナード 陰翳礼讃」（『日本経済新聞』一九九〇年六月二二日夕刊一五面）

・ 佐藤勉・小泉隆・鈴木信宏「『陰翳礼讃』にみる闇と陰影の建築的分類」（『学術講演梗概集F 都市計画 建築経済・住宅問題 建築歴史・意匠』日本建築学会、一九九〇年九月）

・ （無署名）「鮮明な「第三の映像メディア」ハイビジョン作品を上映TBSの宮田氏が企画」（『読売新聞』一九九一年四月二一日夕刊九面）※国際映像ソフト・フェア及び国際エレクトロニック・シネマ・フェスティバルのグランプリ映像作品「陰翳礼讃」（宮田吉雄演出、五二分、一九九〇年）に関する記事。

- 「第30回日本テレビ技術賞受賞技術報告」(『映画テレビ技術』第四六六号、一九九一年六月)
- 和田洋一 「文豪が愛した日本の美 陰翳礼讃」の照明」
- 浜田泰生 「文豪が愛した日本の美 陰翳礼讃」の撮影」
- (無署名) 「現代人物誌 フランソワーズ・モレシャンさん」(『朝日新聞』一九九一年七月四日朝刊一面)
- 《教科書への収録／一九九二年》タイトル「陰翳礼讃」↓『高等学校現代文 四訂版』(角川書店)、『改訂 国語 2』(教育出版)、『新国語2四訂版』(三省堂)、『現代文 二訂版』(明治書院)。
- 特集「谷崎潤一郎の世界」(『国文学 解釈と鑑賞』第五七卷第二号、一九九二年二月)
- 長谷川泉 「谷崎潤一郎の宗教観」
- 高橋世織 「陰翳礼讃」―〈闇〉の喩力とその展開」
- 千葉俊二 「教材としての谷崎潤一郎―「陰翳礼讃」と「文章読本」」(『早稲田大学国語教育研究』第一二集、一九九二年六月)
- 渡部直己 「谷崎潤一郎―擬態の誘惑」(新潮社、一九九二年六月) ※I章「痴と愛―「芸術家」谷崎潤一郎」で「陰翳礼讃」に言及。
- たつみ都志 「谷崎潤一郎・「関西」の衝撃」(和泉書院、一九九二年一月) ※「序にかえて」で「陰翳礼讃」に言及。
- アラン・コルノー、須賀敦子 「対談 ゆらめく伝統の陰翳―映画『めぐり逢う朝』を通して」(『中央公論 文芸特集』第九卷第四号、一九九二年二月)

- 《教科書への収録／一九九三年》タイトル「陰翳礼讃」↓『現代文 改訂版』（尚学図書）。
- 川崎雅史・堀秀行・佐佐木綱「日本の伝統的空間に現われる陰影の意匠性に関する研究」（『土木学会論文集』第四五八号、一九九三年一月）
- （無署名）「取材ファイル真正面から「芸術」問う映画」（『朝日新聞』一九九三年一月二五日夕刊一五面）※映画監督アラン・コルノーへのインタビュ記事。
- 野島孝一「映画「めぐり逢う朝」（フランス）受賞数々、格調高い映像」（『毎日新聞』一九九三年三月一日東京夕刊七面）
- 「アラン・コルノー監督インタビュ 『陰翳礼讃』が私に映画を作らせ、私を導いた」（『キネマ旬報』第一〇九八号、一九九三年一月「下旬号」）
- 「アラン・コルノー監督来日インタビュ 影の方へ向かって」（劇場パンフレット『めぐり逢う朝 TOUTS LES MATINS DU MONDE』ヘラルド・エース、一九九三年二月）※聞き手は長部日出雄。
- 永栄啓伸「陰翳礼讃」・方法としての連想——川端作品との比較を通して」（『皇学館論叢』第二六卷第一号、一九九三年二月）
- ジャック・デリダ「アレティア——篠山紀信の写真集『闇の光』を読む」（小林康夫訳『新潮』第九〇巻第四号、一九九三年四月）※論中で「陰翳礼讃」を引用している。
- 高橋龍介「没後半世紀、業績に光 ロシア人翻訳家」（『毎日新聞』一九九三年四月六日東京夕刊六面）※満鉄が発行したロシア語雑誌『東方評論』編集部のミハイル・ペトロビッチ・グリゴリエフ（1899-1943）に関する記事。「陰翳礼讃」の初のロシア語訳を行った人物である。

- 高田宏「古典再読⑤陰翳礼讃 刺激に満ちた日本文化論」（『読売新聞』一九九三年五月三一日朝刊七面）
- 岡田芳子「陰翳礼讃」ということ」（『天狼』天狼俳句会、第四六卷第七号、一九九三年七月）
- 網野義紘『荷風文学とその周辺』（翰林書房、一九九三年一〇月）※「陰翳礼讃」の世界」を収録。
- 特集「谷崎潤一郎——問題としてのテキスト」（『国文学 解釈と教材の研究』第三八卷第一四号、一九九三年一二月）
 - 蓮實重彦、小森陽一「対談 谷崎礼讃——闘争するディスコース」
 - 西荘保「陰翳礼讃」
- 伊吹和子『われよりほかに——谷崎潤一郎最後の二十年』（講談社、一九九四年二月）※「三の章『夢の浮橋』前後」に「陰翳について」の節があり、「陰翳礼讃」に言及。
- 大島眞木「フランスに蘇った蟬丸——映画『めぐり逢う朝』と日本文化」（『比較文学研究』東大比較文学会、第六五号、一九九四年七月）
- 南博『日本人論』（岩波書店、一九九四年一〇月）※「昭和（戦前）期」の「IV日本文化論・日本風土論」「1日本文化と日本人」で「陰翳礼讃」に言及。
- 阪急沿線都市研究会編『ライフスタイルと都市文化——阪神間モダニズムの光と影』（東方出版、一九九四年一二月）※河内厚郎「陰翳礼讃」の都市」を収録。
- 《教科書への収録／一九九五年》タイトル「陰翳礼讃」↓『高等学校現代文』（角川書店）、『高等学校現代文』（学校図書）、『新編 現代文2』（大修館書店）、『現代文』（筑摩書房）、『精選現代文』（明治書院）。

- 石野泉美「『陰翳礼讃』論——隱翳の美をめぐって」(『日本文芸研究』関西学院大学文学研究科、第四六卷第四号、一九九五年三月)
- 《教科書への収録／一九九六年》タイトル「陰翳礼讃」↓『新版 現代文』(尚学図書)。
- 清水良典「虚構の天体 谷崎潤一郎」(講談社、一九九六年三月) ※第五章「文と陰翳」で「陰翳礼讃」に言及。
- 小林康夫ほか編『知のモラル』(東京大学出版会、一九九六年四月) ※蓮實重彦「〈美〉について——谷崎潤一郎『疎閑日記』から」が「陰翳礼讃」に言及。
- 磯崎新「手法が」(鹿島出版会、一九九七年四月) ※「『陰翳礼讃』再読」を収録。
- 河内厚郎「こころの書『陰翳礼讃』」(『朝日新聞』一九九七年七月一日大阪夕刊七面)
- アドリアーナ・ボスカロ他『谷崎潤一郎国際シンポジウム』(中央公論新社、一九九七年七月)
 - マリア・テレザ・オルシ「『陰翳』の色」
 - ポール・マッカーシー「谷崎文学における他者としての西洋」
 - アンヌ・バイヤール＝坂井「谷崎潤一郎と双面のエクリチュール」
- 村松友視「『ベシー』の客(9) 第9章陰翳礼讃」(『鳩よ!』第一六卷第一号、一九九八年一月)
- 特集「谷崎潤一郎——いま、問い直す」(『国文学 解釈と教材の研究』第四三卷第六号、一九九八年五月)
 - 四方田犬彦「谷崎潤一郎の映画体験」
 - 大島眞木「世界に浸透していく谷崎文学——欧米を中心に」
 - 千葉俊二「廁」

- 中根隆行「谷崎潤一郎「陰翳礼讃」における大衆文化の表象」(『国際日本文学研究集會會議録』第二号、一九九八年一〇月)
- 《教科書への収録／一九九九年》タイトル「陰翳礼讃」↓『精選現代文』(明治書院)。
- 杉本博司『Hiroshi Sugimoto: In Praise Of Shadows』(現代美術センターCCA北九州ほか、一九九九年三月)
- 磯崎新「『陰翳礼讃』とティマイオス」(『新潮』第九六卷第七号、一九九九年七月)
- ドナルド・キーン、多田道太郎、対談「暮らしと美学——『陰翳礼讃』をめぐる」(『あかりの文化誌』第五号、一九九九年七月)
- 五十嵐太郎編『READINGS: 1 建築の書物／都市の書物』(MAX出版、一九九九年一〇月) ※大杉重男「『陰翳礼讃』谷崎潤一郎／『日本文化私観』坂口安吾——美としての日本、崇高としての日本」を収録。
- アラン・コルバン「序文」(A・ベルトラン、P・A・カレ『電気の精とパリ』松本栄寿・小浜清子訳、玉川大学出版、一九九九年一二月)

【二〇〇〇年代】

- 《教科書への収録／二〇〇〇年》タイトル「陰翳礼讃」↓『高等学校現代文2』(三省堂、『現代文 改訂版』(筑摩書房)。
- (城)「名著の風景 谷崎潤一郎著、陰翳礼讃」(『日本経済新聞』二〇〇〇年一月一七日期刊四八面)

- 猪口邦子、島田雅彦、磯崎新「グローバルバリゼーションとは何か（上）猪口・島田・磯崎氏紙上シンポ」（『読売新聞』二〇〇〇年三月六日夕刊七面）
- 前田久徳『谷崎潤一郎 物語の生成』（洋々社、二〇〇〇年三月）※第六章「陰翳の美学」で「陰翳礼讃」に言及。
- 藤原学『「陰翳礼讃」論のパスpekテイヴ』（『学術講演梗概集F-2 建築歴史・意匠』日本建築学会、二〇〇〇年七月）
- 多和田葉子「異邦人の陰影礼賛」（『武蔵野美術』第一一七号、二〇〇〇年八月）
- 展覧会図録『陰翳礼讃 *Eloge de l'ombre*』（クレイインク、二〇〇〇年八月）※ジャンクロード・ルマニー「この展覧会の性格と特徴」が「陰翳礼讃」に言及。同展覧会は「陰翳礼賛 フランスの現代写真——ジャンクロード・ルマニーの視点」と題して、川崎市市民ミュージアム（会期は二〇〇〇年一月三日から二月一七日まで）と山口県立美術館（会期は二〇〇一年一月九日から二月二十八日まで）で開催された。
- 文学・思想懇話会編『近代の夢と知性——文学・思想の昭和一〇年前後』（翰林書房、二〇〇〇年一〇月）※森岡卓司「芸と故郷——谷崎潤一郎「芸談」の位相」が「陰翳礼讃」に言及。
- （無署名）「TEMPO 谷崎「陰翳礼讃」をキーワードに仏現代写真展」（『週刊新潮』第四五巻第四四号、二〇〇〇年一月一六日）
- 村井浩子「谷崎潤一郎と「陰翳礼讃」の世界」（『芦屋市谷崎潤一郎記念館ニュース』第三三号、二〇〇一年二月）
- 尾高修也「『盲目物語』（『国文学 解釈と鑑賞』第六六巻第六号、二〇〇一年六月）

・千葉俊二編『別冊国文学 谷崎潤一郎必携』（別冊第五四号、二〇〇一年一月）

細谷博「陰翳」

安田孝「陰翳礼讃」

・高野清見「高松宮殿下記念世界文化賞受賞 建築家ジャン・ヌーヴェル氏が授賞式で来日」（『読売新聞』二〇〇一年一月二日夕刊一九面）

・谷崎潤一郎『陰翳礼讃 東京をおもう』中央公論新社「中公クラシックス」、二〇〇二年一月）※「陰翳礼讃」の全文を収録。千葉俊二の解説「故郷」の再発見」が「陰翳礼讃」に言及。

・エルマコーワ・リュドミラ「谷崎潤一郎の未発表書簡と来日ロシア人達」（『国文学 解釈と教材の研究』第四七巻第一〇号、二〇〇二年八月）※「陰翳礼讃」の初のロシア語訳を行ったM・グリゴリーエフ（1899-1943）に関する言及あり。

・特集「影」（『日本の美学』第三五号、二〇〇二年二月）

田中貴子・磯崎新・高階秀爾「鼎談 影の日本文化」

平山城児「『陰翳礼讃』の陰翳」

・深澤直人「なくしてしまった美の領域」『陰翳礼讃』谷崎潤一郎著（『AXIS』第一〇一号、二〇〇三年一月）

※英訳「In Praise of Shadows Author: Junichiro Tanizaki: A lost domain of beauty」も併載。

・田中実・須貝千里編『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ 評論編』（右文書院、二〇〇三年二月）※中村

三春「陰翳礼讃の構造原理」を収録。

- 大久保喬樹『日本文化論の系譜——『武士道』から『甘え』の構造』まで』（中央公論新社「中公新書」、二〇〇三年五月）※「IV文人たちの美学 谷崎潤一郎『陰翳礼讃』」の章を収録。
- 佐藤泉「これはわたしのこえか——谷崎潤一郎の間テクスト性について」（『ユリイカ』第三五卷第八号、二〇〇三年五月）
- 野崎敏『谷崎潤一郎と異国の言語』（人文書院、二〇〇三年六月）※第四章「映画の言語の実験」で「陰翳礼讃」に言及。
- （無署名）「文化往来 仏映画カメラマンの「光の美学」」（『日本経済新聞』二〇〇三年八月二一日朝刊四〇面）※フランス人カメラマンのキャロリーヌ・シャンブチエが「陰翳礼讃」に言及。
- 西村将洋「伝統的最先端の視線——一九三〇年代モダニズム考」（『日本文学』日本文学協会、第五二卷第九号、二〇〇三年九月）
- 浪川知子「『谷崎賞』受賞記念 多和田葉子さん芦屋で講演 外来文化と伝統を見据えた谷崎」（『読売新聞』二〇〇三年一月二日大阪夕刊八面）
- 《教科書への収録／二〇〇四年》タイトル「陰翳礼讃」↓『現代文』（右文書院）、『精選現代文』（筑摩書房）。
- 山口政幸『日本の作家100人 谷崎潤一郎 人と文学』（勉強出版、二〇〇四年一月）※「陰翳礼讃」を収録。（無署名）「自由席 鈴木忠志が谷崎に挑む」（『日本経済新聞』二〇〇四年三月二五日夕刊一四面）
- 五味渕典嗣「隠喩としての人形——『蓼喰ふ虫』と一九三〇年代の日本文化論」（『国文学 解釈と教材の研究』第四九卷第六号、二〇〇四年五月）

- 尾上潤一（尾高修也）「細雪」とともに（承前）——戦中戦後の谷崎潤一郎「壮年期―谷崎潤一郎論」その八（『日本大学芸術学部紀要』第四〇号、二〇〇四年七月）
- 安藤忠雄「読書日記③『陰翳礼讃』 闇から捉えた日本の空間」（『日本経済新聞』二〇〇四年七月一五夕夕刊一三面）
- エドワード・G・サイデンステッカー『流れゆく日々―サイデンステッカー自伝』（安西徹雄訳、時事通信出版局、二〇〇四年七月）※「5文人たち」で「陰翳礼讃」に言及。
- 蓮實重彦「半歩遅れの読書術 1944年谷崎の疎開」（『日本経済新聞』二〇〇四年八月二九日朝刊二三三三）
- 永栄啓伸「谷崎潤一郎書誌研究文献目録」（勉誠出版、二〇〇四年一〇月）※「陰翳礼讃」の項目あり。
- 多和田葉子「谷崎潤一郎と虚構としての「日本」（『ユリイカ』第三六卷第一四号「臨時増刊号」、二〇〇四年一月）
- 山内則史「わたしの名は紅」 著書初の邦訳オルハン・パムク氏 今は書くことを恐れない」（『読売新聞』二〇〇四年二月一三日夕夕刊六面）
- 平野啓一郎「陰翳」は、いたるところに——『陰翳礼讃』と「インターナショナル・スタイル」（『昭和住宅メモリー——そして家は生きつづける。』エクスマレッジムック、第五卷第二号、X-Knowledge Home 特別編集 no.5、二〇〇五年八月）
- 特集「陰翳礼讃―暗がりの文化史」（『アート・トップ』第二〇五号、二〇〇五年九月）
 - 諏訪敦「陰翳は演出にあらず」
 - 安村敏信「夜の絵画史―妖しき闇の住人たち」

- 松岡正剛『松岡正剛 千夜千冊』（第六巻、求龍堂、二〇〇六年一〇月）※「第六〇夜 この日本美随筆はいただけない 谷崎潤一郎 陰翳礼讃」を収録。
- オルハン・パムク『イスタンブール』（和久井路子訳、藤原書店、二〇〇七年七月）※「27 町外れの絵ビクチャレスクのような光景」で「陰翳礼讃」に言及。
- 佐藤一生「谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』に学ぶ——日本人が失いつつある貴重な美意識」（『大塚葉報』第六二九号、二〇〇七年一〇月）
- 平野啓一郎『モノログ』（講談社、二〇〇七年二月）※「『陰翳』は、いたるところに——『陰翳礼讃』と」インタビュー「インタビュアル・スタイル」を収録。
- 茂木和行「影の存在論」（『研究紀要 第一分冊 人文学部』聖徳大学、第一八号、二〇〇七年一二月）
- （無署名）「アート探究 S・マクバーニー、谷崎を舞台化 つくって壊す断片のライブ」（『日本経済新聞』二〇〇八年二月二日朝刊三三三面）
- （無署名）「英の演出家・マクバーニー、谷崎作品を舞台化」（『読売新聞』二〇〇八年二月二日夕刊一二二面）
- 劇場パンフレット『春琴 Shun-kin』（世田谷パブリックシアター、二〇〇八年二月）※会期は二月二日から三月五日まで（会場、世田谷パブリックシアター）。
- サイモン・マクバーニー「interview なぜ谷崎か」（聞き手、鴻英良）
千葉俊二「『陰翳礼讃』について」
- 「谷崎文学、舞台に 村上春樹手掛けた英演出家 「陰翳礼讃」機に構想10年 「春琴」東京で」（『朝日新聞』二〇〇八年二月一八日夕刊「be」五面）※サイモン・マクバーニーの舞台に関する記事。

- 高橋豊「演劇 サイモン・マクバーニーが谷崎潤一郎の世界に挑戦 新作「春琴」21日から初演」〔毎日新聞〕二〇〇八年二月一八日東京夕刊五面
- 特集「春琴——谷崎潤一郎『春琴抄』『陰翳礼讃』より」〔シアターガイド〕一九三号、二〇〇八年二月〔三月号）
- サイモン・マクバーニー「作品に自分に、「なぜ」と問いかげながら」
- 熊井玲「『春琴抄』と『陰翳礼讃』にみる『陰』」
- 深津絵里「サイモン作品の美しさが分かる気がします」
- チョウソンハ、高田恵篤「ルールは自由！それがサイモン式!!」
- 高橋豊「演劇 春琴（世田谷パブリックシアター）人間関係の深層心理、重層的に描く」〔毎日新聞〕二〇〇八年三月三日東京夕刊七面
- （無署名）「高校教科書検定 国語に谷崎や三島復活 入試演習の新設も」〔読売新聞〕二〇〇八年三月二六日東京朝刊三九面）※「陰翳礼讃」の教科書復活に言及。
- ヴイクトル・I・ストイキツァ『影の歴史』（岡田温司・西田兼訳、平凡社、二〇〇八年八月）※同書の第1章「影像段階」の注（33）に「陰翳礼讃」への言及がある。
- 石井幹子『新・陰翳礼讃』（祥伝社、二〇〇八年九月）※第1章「和のあかり、再発見」で「陰翳礼讃」に言及。
- 上原克也「回顧2008演劇 海外との共同光る」〔日本経済新聞〕二〇〇八年二月一日朝刊四〇面）※サイモン・マクバーニー「春琴 Shun-kin」の劇評。

- (無署名) 「文化往来 舞台「春琴」英上演、日本とは評価分かれる」(『日本経済新聞』二〇〇九年二月一四日朝刊三六面) ※サイモン・マクバーニー「春琴 Shun-kin」の劇評。
- 千葉俊二、アンヌバヤール・坂井編『谷崎潤一郎——境界を越えて』(笠間書院、二〇〇九年二月) ※千葉俊二「複製技術の時代における「陰翳礼讃」」を収録。
- 山森芳郎「『陰翳礼讃』は虚構か」(『文学芸術』共立女子大学総合文化研究所、第三二号、二〇〇九年二月)
- サイモン・マクバーニー「春琴を探して」(劇場パンフレット『春琴 Shun-kin』世田谷パブリックシアター、二〇〇九年三月) ※会期は三月五日から一六日まで(会場、世田谷パブリックシアター)。
- 原研哉「私と古典4 本当の資源は「美意識」 古典はそれを知っている」(『週刊東洋経済』第六二〇九号、二〇〇九年六月二七日)

【二〇一〇年代】

- 平野啓一郎『かたちだけの愛』(中央公論新社、二〇一〇年二月) ※作中の「4 《陰翳礼讃》」と題する章で「陰翳礼讃」に言及。
- 尾高修也「連載・近代文学雑考その九 「陰翳礼讃」の読み方」(『江古田文学』第二九卷第三号、二〇一〇年三月) 月)
- 小谷野敦『日本文化論のインチキ』(幻冬舎「幻冬舎新書」、二〇一〇年五月) ※「谷崎『陰翳礼讃』にある日本人の美意識」を収録。

- 鎌田浩毅「京大人気Z〇」科学者が読み解く 一生モノの古典 第33回 『陰翳礼讃』谷崎潤一郎著——美は物体にあるのではなく周囲が作り出す明暗にある」(『週刊東洋経済』第六二六五号、二〇一〇年六月五日)
- 国立新美術館編『陰影礼讃 国立美術館コレクションによる』(国立新美術館、二〇一〇年) ※会期は二〇一〇年九月八日から一〇月一八日まで。

中西博之「陰影礼讃」

大谷省吾「須田国太郎と影」

- 酒井直樹・磯前順一編『近代の超克』と京都学派——近代性・帝国・普遍性」(以文社、二〇一〇年一月)
- ※酒井直樹「序 パックス・アメリカナの下での京都学派の哲学」(高橋原訳)が『陰翳礼讃』に言及。
- 磯崎新「on reading 本を開けば スタンダール症候群とは…」(『朝日新聞』二〇一一年一月一六日朝刊一一面) 一三二面)
- (無署名)「余録」(『毎日新聞』二〇一一年四月二八日朝刊一面) ※日本永住を決めたドナルド・キーンと「陰翳礼讃」のエピソードを紹介。
- 浪川知子「食いしん坊 谷崎 陰翳礼讃 光と陰 美を演出」(『読売新聞』二〇一一年五月二四日夕刊五面)
- ※ロンドン大学のステイブン・トッドと平野啓一郎のコメントを掲載。
- 日本比較文学会編『越境する言の葉——世界と出会う日本文学』(彩流社、二〇一一年六月) ※大島真木「フランスにおける谷崎潤一郎」が「陰翳礼讃」に言及。

- 特集「大人の節電×陰翳礼讃」(『中央公論』第一二六卷第八号、二〇一一年七月発行「八月号」) ※特集の冒頭で「陰翳礼讃」を引用。
- 橋本五郎「3月11日の後で 「陰翳礼讃」 谷崎潤一郎著 果敢ない光がもたらす深み」(『読売新聞』二〇一一年七月二四日朝刊一二面)
- 特集「谷崎潤一郎『陰翳礼讃』を読み解く。」(『Casa BRUTUS (カーサ・ブルータス)』第一二卷第九号、二〇一二年八月「九月号」)
 - (無署名)、松苗あけみ画「10分でわかる『陰翳礼讃』。」「谷崎と電気」年表」
 - 平野啓一郎「日本ローカルではない。普遍的・現代的存在としての『陰翳礼讃』。」
 - 千宗屋「待庵に座す千利休は己の陰に道具を沈めた。」
 - インゴ・マウラー「官能的で洗練された、和室の明かり。」
 - 杉本博司「人類が生き延びるための、夜の想像力。」
 - 西沢立衛「美しい振る舞いと文化を育てる建築を。」
 - 原研哉「『世界の冷泉家』、日本の産業資源としての美意識。」
 - アニッシュ・カプーア「TANIZAKIの『陰翳礼讃』はとても素晴らしい本です。」
 - インタビュアー「陰翳空間のマエストロ ピーター・ズントーの最新建築へ。」
 - 「『陰翳礼讃』から着想を得たジェームズ・タレルのアート。」
 - 入江敦彦「電気を消して観よう！陰翳礼讃イギリス映画15選。」

- 田原由紀雄「田原由紀雄の心のかたち 谷崎の陰翳に美の光」(『毎日新聞』二〇一一年一〇月三日大阪夕刊二面) ※「陰翳礼讃」をテーマとした展覧会「谷崎潤一郎の愛した宿にて——それぞれの『隈』を考える」(会期は九月一七日から三日間、京都「ぎおん森庄」にて) に関する記事。
- 望月京「読書日記④『陰翳礼讃』曲作りにも通じる美意識」(『日本経済新聞』二〇一二年二月二日夕刊二一面)
- 苗静「谷崎文学における陰翳の美学——『陰翳礼讃』と『春琴抄』をめぐって」(『繡』早稲田大学文学研究科、第二四号、二〇一二年三月)
- ペーター・ツムトア『建築を考える』(鈴木仁子訳、みすず書房、二〇一二年五月) ※同書の「風景のなかの光」で「陰翳礼讃」に言及。
- 竹山聖「『陰翳礼讃』考——対比と諧調」(『Traverse 新建築学研究』京都大学建築系教室、第一三三号、二〇一二年一二月)
- (無署名)「『倚松庵』 陰翳の美 17日から西宮 英写真家 32点展示」(『読売新聞』大阪版、二〇一二年一二月一〇日朝刊三二面) ※イギリスの建築家・写真家のジョン・バーによる写真展「陰翳を探して」に関する記事。
- 永井敦子「『陰翳礼讃』の世界 よみがえる伝統美展から」(『読売新聞』大阪・阪神版、二〇一二年一月二十六日朝刊三五面、二七日朝刊三二面、二八日〜二九日朝刊三三面、二二月二日及び四日朝刊三三面、全六回) ※芦屋市谷崎潤一郎記念館の二〇一二年度秋の特別展「『陰翳礼讃』の世界——よみがえる伝統美」(会期は九月二九日から一二月二四日まで) に関する記事。各回の副題は以下の通り。「染模様妹背門松」お染人形(一二月二六日)、「ジンベエものがたり」自筆原稿(一二月二七日)、「器類」(一二月二八日)、「和田三造宛 谷崎潤一郎書簡」(一二月二九日)、「三島上龍画「扇美人図」」(二二月二日)、「北野恒富画「雪の朝」」(一二月四日)。

- (井)「ロングセラールの周辺「陰翳礼讃」谷崎潤一郎著」(『読売新聞』二〇一二年一月二六日東京夕刊二一面)
- (無署名)「陰翳礼讃の世界展 光と闇 日本の伝統美 たつみ教授講演 谷崎、自作で追究」(『読売新聞』大阪版、二〇一二年二月一日朝刊三三三面) ※たつみ都志の講演の概要を掲載。
- グレゴリー・ケズナジャット「谷崎潤一郎『蓼喰ふ蟲』におけるオリエンタリズム——「日本回帰」を再考して」(『同志社国文学』第七七号、二〇一二年二月)
- 西野厚志「明視と盲目、あるいは視覚の二種の混乱について——谷崎潤一郎のプラトン受容とその映画的表現」(『日本近代文学』日本近代文学会、第八八集、二〇一三年五月)
- 畑律江「舞台 谷崎ゆかりの地でマクバーニー「春琴」語り・佐助役に笈田ヨシ 兵庫・西宮」(『毎日新聞』二〇一三年七月二五日大阪夕刊三三三面)
- サイモン・マクバーニー「春琴を探して」(劇場パンフレット『春琴 Shun-kin』世田谷パブリックシアター、二〇一三年七月) ※日本国内では、七月二七日に兵庫県立芸術文化センターKOBELCO大ホールで、続く八月一日から一〇日までは世田谷パブリックシアターで公演が行われた。
- 林家たい平「読書日記(4) 陰翳礼讃、美意識は闇と光の関係と再認識」(『日本経済新聞』二〇一三年一月二七日夕刊一三三三面)
- 特集「陰を慕いて——陰翳礼讃を实践する」(『望星』第四五卷第一号、二〇一四年一月)
 - 山折哲雄「湿気と陰翳が育んだ日本人の精神」
 - 面出薫「『陰翳礼讃』が日本のあかりを豊かにする！」
 - アレックス・カー「濃淡の妙を味わう古民家」

- 中野純『闇学』入門（集英社「集英社新書」、二〇一四年一月）※第四章「日本の闇はやわらかい 日本文化は闇の文化」で「陰翳礼讃」に言及。
- （無署名）「ALL ABOUT」ピエール・エルメ 幸せの甘い一口（『読売新聞』二〇一四年一月二日夕刊六面）
- 中村三春『物語の論理学——近代文芸論集』（翰林書房、二〇一四年二月）※「XI闇と光の虚構学——谷崎潤一郎「陰翳礼讃」を収録。
- 中村三春「異郷としての現在——小林秀雄「故郷を失った文学」を起点として」（『層 映像と表現』北海道大学大学院文学研究科映像・表現文化論講座、第七号、二〇一四年三月）
- 谷崎潤一郎『陰翳礼讃』（角川書店「角川ソフィア文庫」、二〇一四年九月）※「陰翳礼讃」の全文を収録。井上章一「「陰翳礼讃」をあえて建築論的に読みこめば」を収録。
- （無署名）「天声人語 和紙が無形文化遺産へ」（『朝日新聞』二〇一四年一〇月三〇日朝刊一面）
- 阿部晴政編『KAWADE夢ムック 文芸別冊 谷崎潤一郎——没後五十年、文学の奇蹟』（河出書房新社、二〇一五年二月）
 - 中上健次「谷崎潤一郎 物語の系譜」
 - 四方田犬彦「モダニスト潤一郎 谷崎潤一郎の映画体験」
 - 西野厚志「谷崎潤一郎研究史」
- 門倉紫麻「あの人と本の話 中谷美紀さんが選んだ一冊 『陰翳礼讃』谷崎潤一郎」（『ダ・ヴィンチ』第二二巻 第二号、二〇一五年二月）

- グレゴリー・ケズナジャット「アメリカにおける『陰翳禮讃』と『蓼喰ふ蟲』の紹介」（『同志社国文学』第八二号、二〇一五年三月）
 - 榊原理智「1950年代日本近代文学の英語翻訳」（『タイ国日本研究国際シンポジウム2014論文報告集』二〇一五年三月）
 - 川上弘美「奥」（二〇一五年五月刊行開始「谷崎潤一郎全集 決定版 全26巻」内容見本、発行年月日未記載）
 - 西村将洋「『陰翳礼讃』と国際的ディスカール——一九三〇年前後の谷崎潤一郎を読む」（『日本近代文学』日本近代文学会、第九二集、二〇一五年五月）
 - 千葉俊二「新発見 谷崎潤一郎 幻の創作ノート「松の木影」 『春琴抄』から『細雪』へ——文豪の試行錯誤の軌跡を辿る」 「資料編——創作ノート「松の木影」より抜粋」（『中央公論』第一二九巻第六号、二〇一五年五月「六月号」） ※ 「陰翳礼讃」に関する新出メモを紹介。
 - 特集「没後50年 谷崎潤一郎の愉楽」（『文学界』第六九巻第八号、二〇一五年八月）
 - 山田詠美・川上弘美「対談わたしたちの好きな谷崎」
 - 金井美恵子「書くことの幸福」
 - 谷崎潤一郎『谷崎潤一郎全集』第一七巻（中央公論新社、二〇一五年九月） ※ 「陰翳礼讃」の全文を収録。宮内淳子「解題」には「陰翳礼讃」に関する校異の調査結果が記載されている。
 - ヨコタ村上孝之『世界のしゃがみ方——和式／洋式トイレの謎を探る』（平凡社「平凡社新書」、二〇一五年九月）
- ※第一章「和式」「様式」を考察する」で「陰翳礼讃」に言及。

- 藤田新策「思い出す本 忘れない本 陰翳礼讃」(『朝日新聞』二〇一六年二月二一日朝刊一六面)
- 清水良典「日本のライフ・オブ・アート——谷崎潤一郎『陰翳礼讃』を中心に」(『愛知淑徳大学大学院文化創造研究科紀要』第三号、二〇一六年三月)
- 酒井順子「陰翳という故郷」(『谷崎潤一郎全集 第21巻 月報12』中央公論新社、二〇一六年四月)
- 千葉俊二ほか編『谷崎潤一郎 中国体験と物語の力』(勉強出版、二〇一六年八月)
清水良典「『お伽噺』としての谷崎文学」
- 山口政幸「陰翳礼讃の端緒としての『西湖の月』」
- 谷崎潤一郎『陰翳礼讃・文章読本』(新潮社「新潮文庫」二〇一六年八月) ※「陰翳礼讃」の全文を収録。筒井康隆「解説」が「陰翳礼讃」に言及。
- 谷崎潤一郎『谷崎潤一郎全集』第二五巻(中央公論新社、二〇一六年九月) ※同書収録の谷崎による創作ノート「松の木影」に「陰翳礼讃」に関する記述あり。
- 伊藤比呂美「2016年、カリフォルニアの谷崎氏」(『谷崎潤一郎全集 第25巻 月報17』中央公論新社、二〇一六年九月)
- 榎本俊二ほか『谷崎万華鏡——谷崎潤一郎マンガアンソロジー』(中央公論新社、二〇一六年十一月) ※高野文子「陰翳礼讃」を収録。
- 五味渕典嗣・日高佳紀編『谷崎潤一郎読本』(翰林書房、二〇一六年二月)
榎原理智「翻訳のポリテクスと『陰翳礼讃』」
安田孝「陰翳礼讃」

- 佐藤憲一「谷崎潤一郎の世界 マンガ化」(『読売新聞』二〇一六年二月六日東京朝刊二九面)
- 谷崎潤一郎『教科書で読む名作 陰翳礼讃・刺青ほか』(ちくま文庫、二〇一七年一月) ※「陰翳礼讃」の全文を収録。同書では高校国語教科書での「陰翳礼讃」の初出として『われわれの国語(一)』(秀英出版、一九五〇年)が挙げられているが(八頁)、この記述は誤りである。『われわれの国語(一)』には谷崎潤一郎「文章と感覚」が掲載されているものの、これは谷崎の『文章読本』(中央公論社、一九三四年)から一部を抄録したものである。
- 平田浩司「陰影がかかる魔法」(『日本経済新聞』二〇一七年三月一九日朝刊一一面)
- ジョー・プライス「私の履歴書(19) 陰影 自然光で輝く日本画、金箔や砂子、変わる表情」(『日本経済新聞』二〇一七年三月一九日朝刊三二面)
- DVDブックレット「椎名林檎と彼奴等がゆく 百鬼夜行2015」(DVD『椎名林檎と彼奴等がゆく 百鬼夜行2015』ユニバーサルミュージック、二〇一七年五月) ※同ブックレットで「Disc2」のタイトルが「椎名林檎と彼奴等による陰翳礼讃2016」と題されている。
- 堀江敏幸「傍らにいた人(16) 谷崎潤一郎「陰翳礼讃」・久生十蘭「昆虫図」、不吉を暗示する小さな虫。」(『日本経済新聞』二〇一七年六月一七日朝刊三二面)
- 谷崎潤一郎(文)、大川裕弘(写真)『陰翳礼讃』(パイ インターナショナル、二〇一八年一月) ※「陰翳礼讃」の全文を収録。

- 「陰翳礼讃 In Praise of Shadows」展実行委員会編『陰翳礼讃 In Praise of Shadows —— 福田篤夫 アラン・ジョンストン二人展』(WAGON、二〇一八年) ※展覧会は二〇一八年五月二日～六月三日に開催された(会場は石川県金沢市の慧星倶楽部)。この図録の本文はキュレーターメイボン・尚子が執筆している。
- 青山郁子「2人展・黄金に輝く町家 福田さん×ジョンストンさん、伝統工芸と美術融合 金沢／石川」(『毎日新聞』二〇一八年五月二七日地方版／石川二六面)
- 坪井秀人編『戦後日本を読みかえる 第1巻 敗戦と占領』(臨川書店、二〇一八年六月) ※塩野加織「『ジャパン・クォーター』にみる日本文学の「輸出」——『遙拝隊長』および「陰翳礼讃」の英訳をめぐって」を収録。
- 清水智史「「陰翳」を凝視する——谷崎潤一郎の東京批判と「陰翳礼讃」」(『日本文学』日本文学協会、第六七巻第九号、二〇一八年九月)
- 枅野俊明「読書日記(1) 陰翳礼讃、日本の美に目を開かれる」(『日本経済新聞』二〇一九年一月一〇日夕刊二面)
- (着)「経済気象台「陰翳」の文化の重要性」(『朝日新聞』二〇一九年五月二一日朝刊一四面)
- ロバート・キャンベル「灯に照らされた闇の深い底」(『朝日新聞』二〇一九年五月二一日朝刊一九面)
- 山折哲雄「生老病死」(『朝日新聞』二〇一九年六月二九日～九月二八日朝刊別刷「be」九面) ※土曜日の朝刊別刷「be」で、「陰影礼讃」に関する連載が行われた。以下、各回の副題と発行日を列挙する。「湿気に覆われたこの国の宿命」(六月二九日)、「明るい光に憧れ、関西に別れ？」(七月六日)、「復興後の東京に募らせた思い」(七月一三日)、「強まる国際色への異議申し立て」(八月三日)、「玉のよう、蠟石のような「肌合」」(九月二一日)、「特有の肌の色つやも日本の美」(九月二八日)。

- 安藤宏「高校「国語」の学習指導要領を巡って」(『読売新聞』二〇一九年九月一〇日東京朝刊一四一面)
 - 氏岡真弓「高校の国語、文学を軽視? 2022年度からの新指導要領に懸念」(『朝日新聞』二〇一九年一〇月一四日朝刊二一面) ※同記事の中の安藤宏「論理と文学をまたぐ人文知 重要」が「陰翳礼讃」に言及。
 - 平出義明「時代の栞「陰翳礼讃」 1933年発表 谷崎潤一郎 闇に見いだした美」(『朝日新聞』二〇一九年一月二七日夕刊三面) ※同記事内の石井幹子「濃淡取り戻し 暮らし豊かに」にも「陰翳礼讃」への言及がある。
- 【二〇二〇年～二〇二一年】**
- 高階秀爾「今週の本棚 なつかしい一冊 『陰翳礼讃』 谷崎潤一郎・著」(『毎日新聞』二〇二〇年六月二〇日朝刊一一面)
 - 板東洋介「谷崎潤一郎 人と思想」(清水書院、二〇二〇年八月) ※第四章「郷土への着地」で「陰翳礼讃」に言及。
 - 島田雅彦『100分de名著 谷崎潤一郎スペシャル』(NHK出版、二〇二〇年一〇月) ※「第4回『陰翳礼讃』——光と影が織りなす美」を収録。
 - 狩野敏次『『陰翳礼讃』を読む——谷崎潤一郎のエロティシズム』(東洋出版、二〇二一年一月)
 - 佐野真子・田井幹夫「谷崎潤一郎「陰翳礼讃」における空間美ついでの研究」(『日本建築学会東海支部研究報告集』第五九号、二〇二一年二月)
 - 柴田勝二「谷崎潤一郎——美と生命の間」(勉誠出版、二〇二一年七月) ※第二部第三章に「6 『陰翳礼讃』の美学」の節がある。

- 富永愛「読書日記（3）『陰翳礼讃』 感性を読み解く面白さ」（『日本経済新聞』二〇二一年八月一九日夕刊二二面）
- ドミニク・チェン『コモンズとしての日本近代文学』（イースト・プレス、二〇二一年八月）※「谷崎潤一郎「陰翳礼讃」——陰翳という名の自由」を収録。
- 宇野重規「西と東と近代日本の知の往来（二三） 明るすぎる東京に距離をおいて——谷崎潤一郎」（『ミネルヴァ通信「究」』第二二八号、二〇二二年一月）